

特別ゲスト 武内清先生より

先日（4月7日）のズーム会議で、各先生方からいいお話がたくさん聞けました。部外者ですが、その時、申し上げたこと、感じたことを、下記に書いておきます。

2つの正反対の視点が思い浮かびました。

1つは、文化的遅滞という言葉がありますが、いつの時代も、学校や教師は、社会の進歩に一步遅れる傾向があり、社会のデジタル化に学校は遅れ、アナログ世代の教師は、学校へのデジタルの導入に反対します。この学校制度や教師の意識の遅れを変えることは必要という視点です。

もう一つの視点は、教育は社会化（socialization）とは違うというものです。社会に適合的な子どもを育てるのは社会化ですが、教育はそれとは重なる部分はあるながらも、社会を批判的にみて変革できる人間を育てる役割があります。これからデジタル化した社会が到来するとはいえ、それに無批判に迎合する人間を育てるのがいい教育というわけではありません。

この2つの視点を行き来しながら、具体的な事例に基づき検証して、いろいろな仕分けもしながら、これからの教育のあり方を考えていくべきだと思いました。

先日の、皆様のご指摘や事例から、考えたことを以下、記録にとどめます。

1 学力テストの高い県で、教師がデジタルの導入に積極的でないのは、これまでの学校での（アナログの）教え方に自信や自負を持っているからでしょう。これまでの学校教育の地域や親との連携も含めての工夫した教育方法は、学力向上の成果を上げているのであり、それは大事にすべきだと思います。

2 ベテラン教師、年齢の高い教師が、デジタルの使用に不慣れで、その適切な使用が出来ません。また、遅れた学校に勤務していた教師は、そのデジタルの学びができていないので、移動した場合、新たな研修が必要です。このように、デジタルに関する教師の得意不得意の現状も踏まえ、それに対する対応（若いデジタルに長けている教師にデジタル教育を任せ、高齢者にはアナログ教育のよさで教育してもらおう等）や研修が必要です。

3 日本のこれまでの学校では、紙の教科書、黒板とチョークを使った一斉指導の工夫を何十年と積み重ねてきた（小グループや班の集団学習も）、それに見合うデジタルを使った教育の方法や実践の積み重ね、その共有がこれから必要であろう。

4 デジタルによる教育は、万能というわけではなく、どのような教科の、どのような内容に有効なのか、またどのような発達段階の子ども（小中高大）に有効なのか、どのような能力や資質の子どもに有効なのか、実証的なデータを、積み重ねる必要がある。

その他、いろいろありますが、このくらいにとどめます。

デジタル教育と言っても、教師用デジタル教科書（電子黒板）が優位で、児童・生徒用デジタル教科書（端末）はまだ先と考えられていた6年前（2016年）に、調査データをもとに書いた新聞記事を添付しておきます。

ラウンドテーブルの成功をお祈りします。